民族統合勢力とイスラム勢力に二極化するインドネシア政界

ハビビ政権が総選挙の来年半ば実施を決定したインドネシアでは、総選挙とその後の正副大統領選挙を睨んだ政界の再編と合従連衡の動きが今後活発化することは必至だ。そうした激動する政局の中で、民主改革派がスハルト旧体制の継承者としてのハビビ現政権に挑むという構図に代わり、次第にナショナリスト勢力対イスラム勢力という次元が浮かび上がっている。この新しい二極化の背後にあるのは、退役軍人を中心とする「国民戦線」とハビビ大統領を取り巻く「イスラム知識人協会」（ＩＣＭＩ）との対立の先鋭化だ。

政界再編の主要勢力は有力４党

ハビビ政権下で初めて開かれた国権の最高機関・国民協議会（ＭＰＲ）の特別会議は11月13日、次期総選挙を99年５月か遅くとも６月に実施することを正式決定した。同会議期間中から、ハビビ政権に代わる暫定政権下での総選挙を求めていた学生らがその後暴徒化したため、政局は予断を許さない状況だ。しかし、選挙日程の確定でインドネシアはともかく民主化への一歩を踏み出そうとしている。

次期総選挙はスハルト体制下での翼賛政党ゴルカルを支えるための形式選挙とは違い、政党結成の自由が認められた初めての民主選挙となる。５月のスハルト退陣以来、すでに100近くの政党が結成されているが、来年の総選挙を争う主要勢力となると支持基盤の規模から次の有力４党になることはほぼ間違いない。

インドネシア民主党（ＰＤＩ）メガワティ派

（メガワティ・スカルノプトリ総裁）

「建国の父」故スカルノ初代大統領の長女、メガワティ総裁（プロフィール参照）が率いる。10月初旬のバリ党大会で同総裁を次期大統領選の党正式候補に指名。政治指針にナショナリズムを置き、多民族国家としての統合を最優先する。経済政策としては、民族資本と華人資本の協調を標榜。経済の中枢を握る華人実業家の同党に対する不安もなくなった。国軍の政治参加に関しては、漸進的廃止を唱える現実路線。それもあり、バリ大会に前後して、多数の退役将校や知識人が入党するなど指導層にも厚みが増している。一方で、農民、低所得者、労働者など草の根レベルの支持層は、「貧者の味方」だった故初代大統領のカリスマ性の継承を同総裁に求めている。広範な階層の要求に応えながら、どう求心力を維持していくか、メガワティ総裁の指導力が問われる。地域的にはジャワ島、バリ島が拠点。

中央執行部には、党内ナンバー２のアレクサンダー・ムアタイ幹事長の他、経済分野のブレーンとしてクウィク・キアンギー氏、財務担当のラクサマナ・スカルディ氏など旧来の幹部がいる。また、新メンバーとして、９月に入党したテオ・シャフェイ退役少将が入っている。注目すべきは、イスラム組織ナフダトゥル・ウラマ（ＮＵ）のアブドゥルラフマン・ワヒド総裁（通称グス・ドゥル：プロフィール参照）の弟ハシム・ワヒド氏が専門家委員会の議長の一人に迎えられたことだ。

メガワティ派は96年の党大会でスハルト政権の「政治工作」によりＰＤＩを追われたため、現行の政党法では政府公認ＰＤＩ（現ブティ派）に対して「造反派」のような位置付けにある。しかし、今や有力政党となった同派はＰＤＩ地方支部の建物を次々にブティ派から接収。「正統論争」に関係なく、ＰＤＩの看板は実質的にはすでにメガワティ派に戻った。

国民覚醒党（ＰＫＢ）

（マトリ・アブドゥル・ジャリル総裁）

会員数3,000万人を誇るインドネシア最大のイスラム組織ＮＵを母体としながら、政教分離の立場をとる穏健改革派政党として７月下旬に発足。マトリ氏を組織上のトップに据えているが、実質上の最高指導者はワヒドＮＵ総裁だ。マトリ総裁以外の主要幹部はムハイミン・イスカンダル幹事長、イマム・クルメン財務部長ら。結党宣言式には、与党ゴルカルの総裁選で破れたエディ・スドラジャト前国防治安相、トゥリ・ストリスノ元副大統領ら多数の退役将校が出席したことが注目される。

国民信託党（ＰＡＮ）

（アミン・ライス総裁）

インドネシア第二のイスラム組織（会員2,800万人）ムハマディアの指導者で、すでに５月に次期大統領選立候補を

表明しているアミン・ライス氏(プロフィール参照)が８月下旬に創設した急進改革派政党。ライス氏には元来イスラム急進派のイメージが強いが、政教分離の原則から党旗揚げの前日にムハマディア総裁を辞任した。党のイスラム色を薄めるため、幹部にはムハマディアだけでなく、カトリックや仏教界、知識人など広範な分野から人材を登用。結成大会にはエミール・サリム元環境相、雑誌「テンポ」のグナワン・モハマッド編集長らが参加した。基本方針も①(ＰＤＩらが反対している)米国型連邦制を受け入れる用意がある②東ティモール問題の住民投票による解決に同意する、など斬新だ。経済分野では、フェイサル・バスリ書記長を中心に改革を進め、市場独占型企業の廃止を優先させると主張する。支持基盤は大都市の学生・知識人、労働組合、中産階級などに加え、スマトラ、スラウェシなどの外島住民。ＮＵを母体とするＰＫＢの強力なライバル。

ゴルカル(ＧＯＬＫＡＲ)

(アクバル・タンジュン総裁)

元来は旧スハルト体制下で政権を支えてきた翼賛政党で、ハビビ現政権の与党。その名の通り傘下には様々な「職能グループ」があるが、５月政変以来それらのグループの一部は独立の政党として離脱した。また、７月初旬の臨時党大会でハビビ大統領に近いアクバル・タンジュン国家官房長官がエディ・スドラジャト前国防治安相を押さえて新総裁に選出されてからは、反ハビビ派の退役軍人ら古参幹部もＰＤＩやＰＫＢ支持に転じている。スリムになった現在の同党は、ハビビ大統領が旧政権時代からその政治活動の基礎にしていたイスラム知識人協会(ＩＣＭＩ)の影響力が強い政党へと変貌しているといえる。副総裁は14人でそのうち４人がハビビ大統領側近の現職閣僚。幹事長はトゥスワンディ退役少将。

国民戦線VS イスラム知識人協会

以上、有力４党の概要を見てきたが、このうち連携関係にあるのが、ＰＤＩ執行部にワヒドＮＵ総裁の弟が入っていることからもわかるように、ＰＤＩとＰＫＢだ。７月初旬、ケマル・イドリス退役中将(元陸軍戦略予備軍司令官)を議長に、退役将校や元政府高官らを糾合して結成された「国民戦線」(バリサン・ナショナル)は、このＰＤＩ・ＰＫＢ連携をインドネシアの「イスラム国家化」を防ぎ、多民族統合を維持しようとするナショナリスト勢力の連合と意味付けている。政党ではなく「道義運動」を自称する「戦線」は、エディ前国防治安相らゴルカル離脱組を含む50人の中核メンバーからなり、一部はＰＤＩ執行部のテオ・シャフェイ退役少将のようにすでにこの連合の内部で活動している。

「戦線」は、ＩＣＭＩの初代会長で元来イスラム指向の強いハビビ大統領が、ＩＣＭＩを楯に背後で活動するイスラム急進主義者の「操り人形」になる可能性を危惧している。確かに、同大統領の顧問の一人が言明するように「民主主義は多数決の原理である限り、イスラム教徒が大半を占めるインドネシアには必然的にイスラム色のある政府が出来る」という一面はある。しかし、それが例えばマレーシア程度のイスラム色であっても、過去の華人に対する暴行事件からもわかるようにインドネシアには決して持ち込んではならないと「戦線」は訴えているのだ。

ところで、この世俗政治勢力対イスラム指向勢力の二極化の中で、アミン・ライス総裁とＰＡＮはどこに行こうとしているのか。「戦線」が「イスラム勢力」と見做しているのは、ゴルカルと今やその母体になったＩＣＭＩ、それにユスルル・マヘンドラ官房副長官を党首にする月星党など明確にイスラムを標榜する一部政党だ。ＰＡＮはこの意味では今のところは中立的勢力であり、「戦線」は可能な限りの人脈を使って世俗政治の重要さをライス総裁に伝えているという。

ただ、ワヒドＮＵ総裁が豪語するように、「(総選挙では)ＰＤＩが第一党、ＰＫＢが第二党」になる可能性が高くなれば、現在はまだ相互に独自の動きをしているイスラム色を持つ政党が反メガワティで協調すると見られる。来年12月に予定のＭＰＲでの大統領選でＰＫＢもメガワティ氏支持を打ち出していることから、(ＭＰＲの議員数・構成がどうなるかなど不明瞭な要因はあるが)メガワティ大統領誕生が視野に入ってくるからだ。今は反ハビビ姿勢を崩さないライス総裁もゴルカルとの連携に動く可能性はある。同総裁もかつてはＩＣＭＩ幹部の一人であり、ゴルカル内にはイスラムという点では思想的に近い人たちもいるのだ。その場合はＰＤＩ・ＰＫＢ(「戦線」)対ＰＡＮ・ゴルカル(ＩＣＭＩ)という対立が鮮明になるだろう。

そして、そこでも忘れてはならないのが国軍(ＡＢＲＩ)の動向。退役軍人の多くがＰＤＩ・ＰＫＢ連携に加担している中で、ウィラント国軍司令官(国防治安相)ら現役軍人は現在のところは、ハビビ政権の改革への努力を支持している。しかし、国軍幹部には旧政権時代からＩＣＭＩを不信の目で見ているものが多い。総選挙に至る政局の推移次第では国軍も極めて流動的だといわざるを得ない。

〔プロフィール〕
インドネシアの有力な在野政治家

■インドネシア民主党（ＰＤＩ）（メガワティ派）総裁
メガワティ・スカルノプトリ
Dyah Permata Megawati Metyawati Soekarnoputri

故スカルノ初代大統領の長女。ファフマワティ夫人（初代大統領の第一夫人）が同女史を産んだ時、「重い黒雲の袋が破れたかのように降り落ちてきた豪雨が産室を壊して流れ込んできた」。停電した闇の中で同女史は産声を上げた。そこで「メガ（雲）ワティ（女性の名前の最後につく言葉）」と名付けられたという。

1996年６月のＰＤＩ党大会でスハルト政権の支援を得た同党反主流派（スルヤディ派、現ブティ派）により総裁の座から降ろされたが、５月のスハルト前大統領失脚後勢力を盛り返した。10月にバリで開催されたＰＤＩメガワティ派党大会で満場一致で同党総裁に選出。「インドネシア民族」統一を最優先する指導者として求心力を増している。独立系調査機関による10月の世論調査では、国民の70.2％が同女史を大統領としての能力を備えていると答えるなど「メガワティ大統領」誕生が視野に入るようになった。

民主化の象徴としての同女史の人気は、インドネシア女性の「母性」を代表するようなその人柄と政治資金面で清潔であるという面に負うところもあるが、何といっても支持者の多くが父親のカリスマ性の継承者を同女史の中に見ていることによる。（共産党と密接な関係をもっていたスカルノ時代の政治には否定的な評価をする国民も多いものの）元大統領が基礎を作った国家５原則「パンチャシラ」はもとより、元大統領が創設したインドネシア国民党（ＰＮＩ）のスローガンとなったマルハヘニズム（「小さき民である農民、労働者、交易商人、船乗り」の味方をする）の中に「インドネシア民族主義」の精神を見いだそうとするムードは確実に高まっている。

また、最近のメガワティ・ブームには、政治情勢だけでなく、ジャワ・バリ文化の基層にある神秘思想がかなりの影響を及ぼしているのも事実だ。スカルノ元大統領が死去して二十数年経った90年代半ばから、元大統領の生まれ変わりを名乗る人物が現れたり、同国トップといわれる霊能者が（スハルト政権下にもかかわらず）「（同女史が）次期大統領になる」と予言するなどの「事件」がそうしたインドネシア独特の宗教文化の影響を示している。

同女史は確かに草の根レベルでの広い支持層を持つが、知識人の中には、40歳まで一介の主婦だった同女史の政治手腕や政策能力を疑問視する声も多い。今後、来年の総選挙後の合従連衡に向けた各政治勢力の駆け引きが一層激しくなるだけに、強い指導力が求められることになる。

▼データ

【年齢】51歳（1947年１月23日生まれ）
スカルノ大統領の２男３女の第２子（長女）として生まれる。
【生地】ジャカルタ（ムルデカ宮殿内）
【家族】夫君はタウフィク・キーマス氏。子供３人
【学歴】チキニ小学校・中学校・高等学校卒
高校の時、スハルト前大統領の長女、シティ・ハルディヤンティ・ルクマナ（トゥトゥ）氏は中学部に在学中で２年後輩だった（因みに、誕生日も同じである）。少女時代は舞踊が得意。
1965－67年：バンドンのパジャジャラン大学農学部で学ぶ。インドネシア民族学生運動（ＧＭＮＩ）バンドン支部に普通会員として入会。
【経歴】
1965年９月30日：９・30事件発生。これを契機にスカルノ大統領は次第に権力を失う。
1967年：スカルノ大統領が病気との知らせで、バンドンからジャカルタに戻る。３月、大統領職が停止され、スカルノ一家はムルデカ宮殿を引き払う。
1970年：スカルノ大統領死去。インドネシア大学心理学科に入学したが中退。パイロットのスリンドロ・スプヤルソ中尉と結婚。間もなくイリアン・ジャヤのビアク島に夫君他７名を乗せた飛行機が墜落して行方不明に。
1972年６月27日：ジャカルタ勤務のエジプト人外交官とスカブミの宗務所で結婚式を挙げる。ところが、１時間半後に「前夫の死亡が確認されていない」という理由で結婚は無効とされる。
1973年：前夫の死亡確認後、元ＧＭＮＩの活動家でその後ＰＤＩ国会議員になった実業家のタウフィク・キーマス氏と結婚。
1987年：当時のＰＤＩ総裁、スルヤディ氏らの懇望で政界入り。ＰＤＩ中央ジャカルタ副支部長から出発。４月の第

５回総選挙に東ジャワ州から立候補して当選。この時長兄のグントゥル氏も立候補し、一種の「スカルノ復古ブーム」が起こる。ＰＤＩの議席は26議席から40議席に増加。
1988年：夫君キーマス氏と国会唯一の「おしどり議員」となる。
1992年：第６回総選挙でスカルノ大統領のポスターを選挙運動に使うことを禁止される。
1993年：末弟のグル氏が一時大統領候補に名乗りを上げる。ＰＤＩの内紛が頂点に達した12月２－６日のＰＤＩスラバヤ総会で、「草の根パワー」によって突然ＰＤＩ新総裁に祭り上げられる。
1996年６月20日：政府に後押しされたスルヤディ氏らに総裁の座を奪われる。
1996年７月27日：ＰＤＩ本部に立てこもっていたメガワティ派ＰＤＩ党員を政府が軍や警察の力で強制排除したことがきっかけでジャカルタ暴動発生。
1997年５月：メガワティ派が追放された後の第７回総選挙では、ＰＤＩの議席は56から11に激減。メガワティ派は正当性を主張して法廷闘争に入る。
1998年５月21日：スハルト大統領退陣。ハビビ新大統領が誕生。
1998年10月：バリ島でＰＤＩメガワティ派総会が開催され、総裁に選出される。
【趣味】読書、ガーデニング

■ナフダトゥル・ウラマ(ＮＵ)総裁
アブドゥルラフマン・ワヒド
K.H.Abdurrahman Wahid

愛称グス・ドゥル。写真で見ると、一見「怪僧」といった風貌。しかし、それは両眼とも悪く、現在は失明寸前ともいわれる事情によるところが大きい。しかし、直接会った印象は宗教者らしい品格と威厳を感じさせ、目のハンディを忘れさせる。3,000万人の会員を擁し、農村を支持基盤にするインドネシア最大のイスラム組織を率いるカリスマ性は十分だ。それでも、ミステリアスな人物という印象は拭えず、視力がそのように弱いにもかかわらずサッカーのコメンテーターとして人気があるのもそうした側面の一つだろう。

その言動には人の意表をつくものが多く、しばしば物議を醸す。スハルト政権時代にも、反政府運動の背後には「・・団体」があるなどと、証拠を明らかにしないまま決めつけたことがあったが、最近では東ジャワに出没する黒装束の殺人集団(「ニンジャ」)の黒幕は閣僚の中にいると発言して、暗に名指しされたアディ・サソノ協同組合相を困惑させている。国交樹立前に敢えてイスラエルを訪問してみせたことも。スハルト前大統領の６選に反対して、長年前大統領とは不仲だったが、97年秋に和解した。しかし、同大統領の肝入りでハビビ現大統領が自らの政治基盤として90年に設立したインドネシア知識人協会(ＩＣＭＩ)には断固として反対の態度を貫いてきている。多民族国家インドネシアをイスラム教国にすることには反対の立場はこの頃から変わっていない。

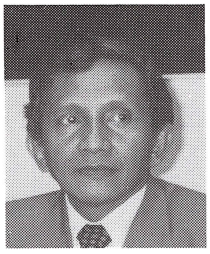
そうした信念もあり、メガワティ女史が政治家になると同女史を支援していたが、96年ＰＤＩが分裂し、全国に暴動が多発するようになると、同女史の政敵で、スハルト前大統領の長女トゥトゥ夫人支持に回るポーズを示した。そして、５月政変後は再びメガワティ支持に回っている。自由な発想と行動の人で、何事にもとらわれないだけに、変わり身も早いといえる。

つい最近も倒れて入院したが、健康が危ぶまれる(11月10日現在すでに自宅で政治活動に復帰している)。実弟がメガワティ派ＰＤＩの幹部になっているという事実も、同派とＮＵの結束が今後かなり強くなることを予想させる。しかし、７月にＮＵ唯一の政党として国民覚醒党(ＰＫＢ)を結成したにもかかわらず、その後、さらにＮＵを基盤に３党が生まれた。同氏の健康不安とあいまってＮＵの内部分裂の兆しを懸念する声も多い。

▼データ
【年齢】58歳(1940年８月４日生まれ)
ＮＵ創設者ハシム・アシュアリの孫として生まれる。父親のワヒド・ハシム氏もＮＵ幹部であり、独立インドネシアの初代宗教相に就任している。
【生地】東ジャワ州ジョムバン
【家族】夫人と子供４人
【学歴】インドネシアでイスラム教育を受ける。
10代からイラク(バクダッドのイスラム大学)、エジプト、欧州に留学し、宗教に対する人道主義的アプローチとリベラルな政治姿勢を形成した。
【経歴】
1984年：ＮＵ総裁に。非政党化、農村開発を中心とした社会開発、教育の振興がＮＵの基本方針と定められた。

1990年：ＩＣＭＩ創立時に入会を誘われたが、ハビビ会長(現大統領)はイスラムを政治に利用していると非難。それ以来、ハビビ氏とは不仲に。
1991年：ＩＣＭＩに対抗して在野の知識人とともに「フォーラム・デモクラシー」(民主フォーラム)を結成。
1997年７月６日：鼻血を出して入院。原因は高血圧。
1998年７月23日：国民覚醒党(ＰＫＢ)を設立。
1998年10月17日：退役将官有志を中心に結成された国民戦線(ＦＮ)の幹部と会った際、東ジャワの「ニンジャ」連続殺人事件の仕掛け人は閣僚の中にもいると発言し、物議を醸した。その直後に倒れて入院。高血圧が原因といわれている。
【横顔】
・生まれつき片方の目は視野狭窄で、もう一方の目は白内障。
・叔父のユスフ・ハシム氏とは不仲が伝えられている。(1998年10月：弟のサラフディン・ワヒド氏と叔父らがＮＵ内に新党・信徒復興党〔ＰＫＵ〕を旗揚げ)
・サッカーのシーズンにはスポーツ記事の依頼が殺到する。

■国民信託党(ＰＡＮ)総裁
アミン・ライス
Dr.H.M.Amien Rais



今年５月20日、「民族覚醒の日」にスハルト大統領(当時)の退陣を求めて、学生による100万人総決起集会が開かれることになっていたが、同氏の一言でそれが中止になったのは記憶に新しいところだ。翌日スハルト氏は32年座り続けた大統領の地位から降りた。

2,800万人の会員を持ち、大都市を拠点にするインドネシア第二のイスラム組織ムハマディアの前総裁。８月23日に新党・国民信託党(ＰＡＮ)を旗揚げし、その総裁に就任した。「インドネシア改革の父」、「人間機関車」などの異名を持つ活動家で雄弁家。スハルト前大統領の後継者に関する議論がまだタブー視されていた94年、ポスト・スハルトの大統領について、(１)パンチャシラと45年憲法への忠誠心(２)将来についての明確なビジョン(３)国際感覚ーなどの条件を挙げ、後継者問題を堂々と論じた。

反スハルトのスタンスは、1981年初め、７年間の米国留学を終えて帰国した時に始まる。同氏には、欧米流の社会科学的観点からスハルト開発独裁政権の弊害は明らかだったからだ。以来、一貫して「反汚職」「反癒着」「反ネポティズム」の「反ＫＫＮ」をスローガンに反政府闘争を展開してきた。

▼データ
【年齢】54歳(1944年４月26日生まれ)
【生地】中ジャワ州ソロ
【家族】1969年：クスナスリヤティ・スリ・ラハユ夫人と結婚。３男２女。
【学歴】幼稚園から高校まではムハマディアの学校に通う。
1962年：高校卒業。両親は同氏がイスラム教の導師になることを期待していたので、イスラム大学とガジャマダ大学に進学するつもりだった。しかし、二股はかけられないので後者の社会政治学部に進学(同大学在学中、スハルト時代初期の学生デモ中に犠牲になったジャーナリストを記念した「ザイナル・ザクス記念賞」を受賞。中学時代から新聞に投稿したりして文才を発揮していた)。
1969年：ガジャマダ大学卒業と同時に、米国インディアナ州のノートルダム大学大学院に進学。修士論文は「モスクワに接近したアンワル・サダト下のエジプト」。
1974年：シカゴ大学博士課程で学ぶ。博士論文は「エジプトにおけるイスラム教徒の人類同胞主義とその誕生、崩壊、復興」。米国留学中にエジプト・カイロのアル・アズハル大学の特待生として１年間研究留学。
【経歴】
1981年：米国から帰国後ムハマディアの活動に参加。同時にガジャマダ大学講師にも。
1990年：インドネシア・イスラム知識人協会(ＩＣＭＩ)創設者49人の一人として署名。
1993年：このころから大統領後継問題で発言。
1995年：ムハマディア総裁に就任。
1997年２月24日：ＩＣＭＩ専門家会議の議長を辞任(顧問会議の一員に留まる)。表向きは多忙が理由とされたが、米国の鉱山会社フリーポートやブサン金鉱問題に関する政府批判が原因でスハルト政権から圧力がかけられたのが真相。
1998年５月31日：学生組織から「改革賞」を授与される。
1998年８月23日：国民信託党(ＰＡＮ)を旗揚げ、その総裁に就任。

(アジア政治アナリスト　勝田 悟)